

競馬

織田作之助



朝からどんより曇くもっていたが、雨にはならず、低い雲が陰気いんきに垂れた競馬場を黒い秋風が黒く走っていた。午後になると急に暗さが増して行った。しぜん人も馬も重苦しい気持に沈しずんでしまいそうだったが、しかしふと通り魔まが過ぎ去った跡あとのような虚むなしい慌あわただしさにせき立てられるのは、こんな日は競走レースが荒あれて大穴が出るからだろうか。晩秋の黄昏たそがれがはや忍しのび寄つたような翳かげの中を焦躁しょうそうの色を帯びた殺気がふと行き交っていた。

第四角コーナーまで後方の馬ごみに包まれて、黒地に白い銭形紋散ぜにがたもんちらしきしゆの騎手きしゆの服も見えず、その馬に投票していた少数の者もほとんど諦めあきらめかけていたような馬が、最後の直線コースにかかると急に馬ごみの中から抜け出ぬしてぐいぐい伸のびて行く。

鞭は持たず、伏せをしたように頭を低めて、馬の背中にぴたりと体をつけたまま、手綱をしゃくつている騎手の服の不気味な黒と馬の胸につけた数字の1がぱつと観衆の眼にはいり、1か7か9か6かと眼を凝らした途端、はやゴール直前で白い息を吐いている先頭の馬に並び、はげしく競り合ったあげく、わずかに鼻だけ抜いて単勝二百円の大穴だ。そして次の障碍競走では、人気馬が三頭も同じ障碍で重なるように落馬し、騎手はその場で絶命するという騒ぎの際をねらつて、腐り厩舎の腐り馬と嗤われていた馬が見習騎手の鞭にペタペタ尻をしばかれながらゴールインして単複二百円の配当、馬主も騎手も諦めて単式はほかの馬に投票していたという話が伝えられるくらいに番狂わせである。

そんな競走が続くと、もう誰もかれも得体の知れぬ魔に憑

かれたように馬券の買い方が乱れて来る。前の晩自宅で血統や調教タイムを綿密に調べ、出遅れや落馬癖の有無、騎手の上手下手、距離の適不適まで勘定に入れて、これならば絶対確実だと出馬表に赤鉛筆で印をつけて来たものも、場内を乱れ飛ぶニュースを耳にすると、途端に惑わされて印もつけて来なかつたような変挺な馬を買ってしまう。朝、駅で売っている数種類の予想表を照らし合わせどの予想表にも太字で挙げている本命（力量、人気共に第一位の馬）だけを、三着まで配当のある確実な複式で買うという小心な堅実主義の男が、走るの畜生だし、乗るのは他人だし、本命といつても自分のままになるものか、もう競馬はやめたと予想表は尻に敷いて芝生にちよんぼりと坐り、残りの競走は見送る肚を決めたのに、競走場へ現れた馬の中に脱糞をした馬がいるのを見つ

けると、あの糞きようの柔やわさはただごとでない、昂奮劑こうふんざいのせいだ、あの馬は今日きようはやるらしいと、慌あわてて馬券の売場へ駈かけ出して行く。三番片脚かたあし乗らんか、三番片脚乗らんかと呶ど鳴なっている男は、今しがた厩舎うまやの者らしい風体の男が三番の馬券を買って行つたのを見たのだ。三番といえばまるで勝負にならぬ位貧弱な馬で、まさかこれが穴になるとは思えなかつたが、やはりその男の風体が気になる、といつて二十円損をするのも莫迦ぼからしく、馬の片脚五円ずつ出し合つて四人で一枚の馬券を買う仲間を探しているのだつた。あの男はこの競走レースは穴が出そうだと、厩舎のニュースを訊きき廻まわつたが、訊く度に違ちがう馬を教えられて迷いに迷い、挽馬場ひきばと馬券の売場の間をうろうろ行つたり来たりして半泣きになつたあげく、血走つた眼を閉じて鉛筆の先で出馬表を突つくと、七番に当つたのでラッ

キーセブんだと喜び、売場へ駆けつけていく途中、知人に会い、何番にするのかと訊けば、五番だという。そうか、やはり五番がいいかねと、五番の馬がスタートでひどく出遅れる癖くせがあるのを忘れて、それを買ってしまったのだ。——人々はもはや耳かきですくうほどの理性すら無くしてしまい、場内を黒く走る風にふと寒々と吹ふかれて右往左往する表情は、何か狂気きょうきじみていた。

寺田はしかしそんなあたりの空気にひとり超然ちようぜんとして、惑いも迷いもせず、朝の最初の競走レースから1の番号の馬ばかり買いつづけていた。挽馬場の馬の気配も見ず、予想表も持たず、ニュースも聴きかず、一つの競走レースが済んで次の競走レースの馬券発売の窓口がコトリと木の音を立ててあくど、何のためらいもなく誰よりも先きに、一番！ と手をさし込こむのだった。

何番が売れているのかと、人気を調べるために窓口へ寄つていた人々は、余裕綽々とした寺田の買い方にふと小憎らしくなつた顔を見上げるのだつたが、そんな時寺田の眼は苛々と燃えて急に挑み掛るようだつた。何かしら思い詰めているのか安心して仮面のような虚しさに蒼ざめていた顔が、瞬間カツと血の色を泛べて、ただごとでない激しさであつた。

迷いもせず一途に1の数字を追うて行く買い方は、行き当りばつたりと思案を変えて行く人々の狂気を遠くはなれていたわけだが、しかし取り乱さぬその冷静さがかえつて普通でなく、度の過ぎた潔癖症の果てが狂氣に通ずるように、頑なその一途さはふと常規を外れていたかも知れない。寺田が1の数字を追い続けたのも、実はなくなつた細君が一代という名であつたからだ。

寺田は細君の生きている間競馬場へ足を向けたことは一度もなかった。寺田は京都生れで、中学校も京都A中、高等学校も三高、京都帝大の史学科を出ると母校のA中の歴史の教師になったという男にあり勝ちな、小さな律義者りちぎもので、病毒に感染おそすることを惧れたのと遊興費が惜おしくて、宮川町へも祇園ぎおんへも行ったことがないというくらいだから、まして教師の分際で競馬遊びなぞ出来るような男ではなかった、といつてしまえば簡単だが、ただそれだけではなかった。

寺田の細君は本名の一代という名で交潤社こうじゆんしゃの女給をしていた。交潤社は四条通と木屋町通の角にある地下室の酒場で、撮影所さつえいじよの連中や贅沢ぜいたくな学生達が行く、京都ではまず高級な酒場だったし、しかも一代はそのナンバーワンだったから、寺

田のような風采ふうさいの上らぬ律義者の中学教師が一代を細君にしたと聴いて、驚おどろかぬ者はなかつた。もつとも一代の方では寺田の野暮やぼな生真面目きまじめさを見込んだのかも知れない。もともと酒場遊びなぞする男ではなかつたのだが、ある夜同僚どうりょうに無理矢理さそ誘さそわれて行き、割前勘定になるかも知れないとひやひやしなから、おずおずと黒ビールを飲んでゐる寺田の横に坐つた時、一代は気が詰りそうになつた。ところが、翌あくる日から寺田は毎夜一代を目当てに通つて来た。置いて行く祝儀チップもすくなく、一代は相手にしなかつたが、十日目の夜だしぬけに結婚けっこんしてくれと言う。隣となりのボックスにいる撮影所の助監督じょかんとくに秋波を送りながら、いい加減に聴き流していたが、それから一週間毎夜同じ言葉をくりかえさされているうちに、ふと寺田の一途ひさに心惹ひかれた。二十八歳さいの今日まで女を知らずに来た

という話もう冗談じょうだんに思えず、十八の歳としから体を濡ぬらして来た一代にとつては、地道な結婚をするまたとない機会かたかも知れなかつた。思えば自分ももう二十六、そろそろ身を堅かためてもいい歳だろう。都ホテルや京都ホテルで嗅かいだ男のポマードにおの匂においよりも、野暮天で糞真面目くそまじめゆえ「お寺さん」で通つてゐる醜男ぶおとこの寺田に作つてやる味噌汁みそしるの匂においの方が、貧しかつた実家の破れ障子をふと想おもい出させるような沁しみ々じみした幼心のなつかしさだと、一代も一皮剥はげば古い女だつた。風采は上らぬといえ帝大出ていだいだし笑えば白い歯ならびが清潔だと、そんなことも勘定に入れた。

ところが寺田の両親が反対した。「お寺さん」という綽名あだなはそれと知らずにつけられたのだが、実は寺田の生家は代々堀川ほりかわの仏具屋で、寺田の嫁よめも商売柄僧侶しょうばいの娘を貰もらうつもりだつ

たのだ。反対された寺田は実家を飛び出すと、銀閣寺附近の西田町に家を借りて一代と世帯しよたいを持った。寺田にしては随分ずいぶん思い切った大胆だいたんさで、それだけ一代にのぼせていたわけだったが、しかし勘当かんどうになった上にそのことが勤め先のA中に知れて免職めんしよくになると、やはり寺田は蒼くなつた。交潤社の客で一代に通つていた中島某ぼうはA中の父兄会の役員だつたのだ。寺田は素行不良の理由で免職になつたことをまるで前科者になつてしまつたように考え、もはや社会に容いれられぬ人間になつた気持で、就職口を探しに行こうとはせず、頭から蒲団ふとんをかぶつて毎日ごろんごろんしていた。夜、一代の柔い胸の円みに触ふれたり、子供のように吸つたりすることが唯一ゆいいつのたのしみで、律義な小心者もふと破れかぶれの情痴じょうちめいた日々を送つていたが、一代ももともと夜の時間を奔放ほんぼうに送つて来た

女であつた。肩かたや胸の齒形を愉たのしむようなマゾヒズムの傾向けいこうもあつた。壁かべ一重の隣家を憚はばかつて、蹴上けあげの旅館へ寺田を連れ
て行つたりした。そんな旅館を一代が知つていたのかと寺田
はふと嫉妬しつとの血を燃やしたが、しかしそんな瞬間の想いは一
代の魅力みりよくですぐ消えてしまつた。

ある夜、一代は痛いといふと飛び上つた。驚いて口をはなし、手で
柔く押おさえると、それでも痛いといふ、血がにじんでも痛いとい
は言わなかつた女だつたのに、妊娠にんしんしたのかと乳首を見たが
黒くもない。何もせぬのに夜通し痛がつていたので、乳腺炎にゅうせんえん
になつたのかと大学病院へ行き、齒形が紫色むらさきいろになつてい
る胸をさすがに恥はずかしそうにひろげて診みてもらつたと、乳癌にゅうがんだつた。
未産婦で乳癌になるひとは珍めずらしいと、医者も不思議がつて
いた。入院して乳房ちゅうぶささを切り取つてもらつた。退院まで四十日

も掛り、その後もレントゲンとラジウムを掛けに通つたので、教師をしていた間けちけちと蓄めていた貯金もすっかり心細くなつてしまい、寺田は大学時代の旧師に泣きついて、史学雑誌の編輯へんしゅうの仕事を世話してもらつた。ところが、一代は退院後二月ばかりたつとこんどは下腹の激痛げきつうを訴え出した。寺田は夜通し撫なぜてやったが、痛みは消えず、しまいには油汗あぶらあせをタラタラ流して、痛い痛いと転げ廻つた。再発した癌が子宮へ廻つていたので。しかし医者には入院する必要はないと言う。ラジウムを掛けに通うだけでいいが、しかし通うのが苦痛で堪たえ切れないのなら、無理に通わなくてもいいという。その言葉の裏は、死の宣告だつた。癌の再発は治らぬものとされているのだ。余り打たぬようにと、医者は寺田の手に鎮痛剤ちんつうざいのロンパンを渡わたした。モルヒネが少量はいつているらしくつ

た。死ぬときまつた人間ならもうモルヒネ中毒の惧れもないはずなのに、あまり打たぬようにと注意するところを見れば、万に一つ治る奇蹟きせきがあるのだろうか、寺田は希望を捨てず、ひごろ日頃けちくさい男だのに新聞広告で見た高価な短波治療機ちりようきを取り寄せたり、枇杷びわの葉療法はつりょうの機械きがいを神戸まで買いに行ったりした。人から聴けば臍へその緒おも煎じせん、牛蒡ごぼうの種くさねもいと聴いて摺鉢すりばちでゴシゴシとつぶした。

しかし一代は衰弱する一方で、水の引くようにみるみる痩やせて行き、癌特有の堪え切れぬ悪臭あくしゅうはふと死のにおいであった。寺田はもはや恥も外聞も忘れて、腫物はれもの一切いっさいにご利益りやくがあると近所の人に聴いた生駒いこまの石切まで一代の腰巻こしまきを持って行き、特等の祈祷きとうをしてもらつた足で、南無石切大明神様なむいせきせきだいめいじん、なにとぞご利益りやくをもつて哀あはれなる二十六歳の女の子宮癌みやがんでんを救い

たまえと、あらぬことを口走りながらお百度を踏ふんだ帰り、参詣道さんけいどうで灸きゅうのもぐさを買きつて来るのだった。それでも一代の激痛は収まらず、注射の切れた時の苦しみ方は生きながらの地獄じじくであつた。ロンパンがなくなつたと気がついて、派出所護婦が近くの医者まで貫くわんいに走はつてゐる間、一代は下腹をかきむしるような手つきをしながら、唇くちびるを突き出し、ポロポロ涙なみだを流して、のた打ち廻まるのだ。世の中にこんな苦痛があつたのかと、寺田もともにポロポロ涙を流して、おろおろ見てゐる。一代は急に、嘔かんで、嘔かんで！ と叫さけんだ。下腹の苦痛を忘れるために、肩を嘔かんでもらいたいのだろう。寺田はガブリと一代の肩にかぶりついた。かつては豊満な脂肪しぼうで柔かつた肩も今は痛々しいくらい痩せて、寺田は気の遠くなるほど悲しかつたが、一代ももう寺田に肩を嘔かまれながら昔むかしの

喜びはなく、痛い痛いと言きにも情痴の響きはなかつた。やつと看護婦が帰つて来たが、のろまな看護婦がアンプルを切つたり注射液を吸い上げたり、腕を消毒したりするのに手間取っているのを見ると、寺田は一代の苦痛を一秒でも早く和やわらげてやりたさに、早く早くと自分も手伝つてやるのだった。

気の弱い寺田はもともと注射が嫌いで、というより、注射の針の中には悪魔の毒気が吹込まれていると信じている頑冥がんめいな婆ばあさん以上に注射を怖おそれ、伝染病の予防注射の時など、針の先を見ただけで真蒼まっさおになつて卒倒そつとうしたこともあり、高等教育を受けた男に似合わぬと嗤わらわれていたくらいだから、はじめのうち看護婦が一代の腕をまくり上げただけで、もう隣の部屋へやへ逃げ込み、注射が終つてからおそるおそる出て来るといふありさまであつた。針という感覚だけで参つてしまうよ

うな弱い神経なのだ。ところが、癌の苦痛という感覚の前にはもうそんな神経もいつか凶太くなつて来たのか、背に腹は代えられぬ注射の手伝いをしていっているうちに、次第に馴なれて来て、しまいには夜中看護婦ねむが眠ねむっている間一代のうめき声を聴くと、寺田は見よう見真みまね似の針を一代の腕に打つてやるのだった。

そんなある日、一代の名宛なあてで速達の葉書が来た。看護婦あすが銭湯へ行った留守中で、寺田が受け取つて見ると「明日午前あす十一時、淀競馬場よど一等館入口、去年と同じ場所あすで待つている。来い。」と簡単な走り書きで、差出人の名はなかった。葉書いっぱい一杯の筆太ふでぶとの字は男の手らしく、高飛車たかびしやな文調はいずれは一代を自由いっぱいにしていた男に違ちがいがない。去年と同じ場所という葉書はふといやな聯想れんそうをさそい、競馬場からの帰り昂奮あきを新た

にするために行つたのは、あの蹴上の旅館だろうか、寺田は真蒼になった。一代に何人かの男があつたことは薄々知つていたが、住所を教えていたところを見ればまだ関係が続いているのかと、感覺的にたまらなかつた。寺田はその葉書を破つて捨てる、血相を変えて病室へはいつて行つた。しかし、一代は油汗を流してのたうち廻つていた。激痛の発作がはじまつていたのだ。寺田はあわててロンパンのアンプルを切つて、注射器に吸い上げると、いつもの癖で針の先を上向けて、空気を外に出そうとしたが、何思つたのかふと手を停めると、じつと針の先を見つめていた。注射器の中には空気のガラン洞が出来ている。このまま静脈に刺してやろうかと、寺田は静脈へ空気を入れると命がないと言つた看護婦の言葉を想い出し、狂暴に燃える眼で一代の腕を見た。が、一代の

腕は皮膚がカサカサに乾いて黝く垢がたまり、悲しいまでに細かった。この腕であの競馬の男の首を背中を腰を物狂おしく抱いたとは、もう寺田は思えなかつた。はだけた寝巻から覗いている胸も手術の跡が醜く窪み、女の胸ではなかつた。ふと眼を外らすと、寺田はもう上向けた注射器の底を押して、液を噴き上げていた。すると、嫉妬は空気と共に流れ出し、安心した寺田は一代の腕のカサカサした皮をつまみ上げると、プスリと針を突き刺した。ぐつと肉の中まで入れて液を押すと、間もなく薬が効いて来たのか、一代はけろりと静かになり、死んだように眠ってしまったが、耳を澄ませるとかすかな鼾はあつた。

それから一週間たったあの夕方、治療に使う枇杷の葉を看護婦と二人で切つて籠に入れてみると、うしろからちよつと

と一代の聲がした。振り向くと、唇の間からたらんと舌を垂れ、ウオーウオーとけだもののような声を出して苦悶くもんしていた。驚いて看護婦が強心剤のアンプルを切つて、消毒もせず一代の胸に突き刺そうとしたが、肉が固くてはいらなかつた。僕ぼくにやらせると寺田が無理矢理突き刺そうとすると、針が折れた。一代の息は絶えていた。歳月がたつと、一代の想出も次第に薄れて行つたが、しかし折れた針の先のように嫉妬の想いだけは不思議に寺田の胸をチクチクと刺し、毎年春と秋競馬のシーズンが来ると、傷口がうずくようだった。競馬をする人間がすべて一代に関係があつたように思われて、この嫉妬の激しさは寺田自身にも不思議なくらいであつた。ところが、そんな寺田がふとしたことから競馬に凝りだしたのだから、人間というものはなかなか莫迦にならない。

寺田は一代が死んで間もなく史学雑誌の編輯をやめさせられた。看病に追われて怠なまけていた上、一代が死んだ当座ばかぽかんとして半月も編輯所へ顔を見せなかつたのだ。寺田はまた旧師に泣きついて、美術雑誌の編輯の口を世話してもらつた。編輯員の二人までがおりから始まつた事変しやうしゆうに召集されて、欠員があつたのだ。こんどは怠なまけずこつこつと勤めて二年たつと、編輯長がまた召集されて、そのあとの椅子いすへついた。その秋大阪に住んでいるある作家に隨筆たのを頼むと、しめきり切きりの日に速達げんこうが来て、原稿は淀の競馬の初日に競馬場へ持つて行くから、原稿料を持つて淀まで来てくれという。寺田はその速達の字がかつて一代に來た葉書の字とまるで違つてゐることに安心したが、しかし自分で行くのはさすがにいやだつた。といつて、ほかの者ではその作家の顔は判わからない。私情で雑誌

の発行を遅らせては済まない、寺田はやはり律義者らしく
いやいや競馬場へ出掛けた。ちようど一競走レース終つたところら
しく、スタンドからぞろぞろと引き揚あげて来る群衆の顔を、
この中に一代の男がいるはずだとカツと睨にらみつけていると、
やあ済まん済まん作家が寄つて来て、君を探していたんだ
よ。どうやら朝からスリ続けて、寺田が持つて来る原稿料を
当てにしていたらしかつた。渡して原稿を貰い、帰ろうとし
たが、僕も今日は京都へ廻るから終るまでつき合わないかと
引き停められると、寺田はもう気が弱かつた。スタンドに並
んで作家の口から、君アンナ・カレーニナの競馬の場面読ん
だ？ しかしあれでもないよ、どうも競馬を本当に描びょうしや写した
文学はないね、競馬は女より面白いのにな、僕は競馬場へ女
を連れて来る奴やつの気が知れんだ、競馬があれば僕はもう女

はいらんね、その証拠しょうこに僕はいまだに独身だからね、西鶴さいかくの五人女に「乗り掛つたる馬」という言葉があるが、僕はこんなスリルを捨てて女に乗り掛ろうとは思わんよ……という話を聴きながら競走レースを見ている間、寺田はふと競馬への反感を忘れていた。そして次の競走レースでふらふらと馬券を買うと、寺田の買った馬は百六十円の配当をつけた。払戻はらいもどしの窓口へさし込んだ手へ、無造作に札さつを載のせられた時の快感は、はじめて想いを遂とげた一代の肌はだよりもスリルがあり、その馬を教えるくれた作家にふと女心めいた頼もしさを感じながら、寺田はにわかになみついて行つた。

小心な男ほど羽目を外した溺れ方おぼをするのが競馬の不思議さであろうか。手引きをした作家の方が呆あきれてしまう位、寺田は向こう見ずな賭かけ方をした。執筆しつぴつしゃ者へ渡す謝礼の金まで

注ぎ込み、印刷屋への払いも馬券に変わり、ノミ屋へ取られて行つた。つねに明日の希望があるところが競馬のありがたさだと言つていた作家も、六日目にはもう印税や稿料の前借がきかなくなつたのか、とうとう姿を見せなかつた。が、寺田だけは高利貸の金を借りてやつて来た。七日目はセルの着物に下駄げたばきで来た。洋服を質入れしたのだ。

そして八日目の今日は淀の最終日であつた。これだけは手離てばなすまいと思つていた一代のかたみの着物を質に入れて来たのだ。質屋の暖簾のれんをくぐつて出た時は、もう寺田は一代の想いを殺してしまつた気持だつた。そして、今日この金をスツてしまえば、自分もまた一代の想いと一緒に死ぬほかはないと、しよんぼり競馬場へはいつた途端、どんより曇つた空のよう

に暗い寺田の頭にまず閃いたのは殺してしまつたはずの一代の想いであつた。女よりもスリルがあるという競馬の魅力に惹かれて来たという気持でもなかつた。この最後の一日で取り戻さねば破滅だという気持でもなかつた。一代の想いと共に来たのだということよりほかに、もう何も考えられなかつた。そしてその想いの激しさは久しぶりに甦つた嫉妬の激しさであろうか、放心したような寺田の表情の中で、眼だけは挑みかかるようにギラついていた。

だから、今日の寺田は一代の一の字をねらつて、1の番号ばかり執拗に追い続けていた。その馬がどんな馬であろうと頓着せず、勝負にならぬような駄馬であればあるほど、自虐めいた快感があつた。ところが、その日は不思議に1の番号の馬が大穴になつた。内枠だから有利だとしてたり気にいつて

みても追っつかぬ位で、さすがの人々も今日は一番がはいるぞと気づいたが、しかしもうそろそろ風向きちようしようが変る頃だと、わざと一番を敬遠したくなる競馬心理を嘲笑するようちようしように、やはり単で来て、本命のくせに人氣が割れたのか意外な好配当をつけたりする。寺田ははじめのうち有頂天うちようてんになつて、来た、来た！ と飛び上り、まさかと思つて諦めていた時など、思わず万歳と叫ぶくらいだったレースが、もう第八競走レースまでに五つも単勝を取つてしまうと、不気味になつて来て、いつか重苦しい氣持に沈んで行つた。すると、あの見知らぬ競馬の男への嫉妬がずっと頭をかすめるのだつた。

第九の四歳馬特別競走レースでは、1のホワイトステーツ号が大きく出遅れて勝負を投げてしまつたが、次の新抽優勝競走しんちゆううでは寺田の買ったラツキーカップ号が二着馬を三馬身引離して、

五番人気で百六十円の大穴だった。寺田はむしろ悲痛な顔をしながら、配当を受取りに行くと、窓口で配当を貰っていたジャンパーの男が振り向いてにやりと笑った。皮膚の色が女のように白く、すこ凄^いほどの美貌びぼうのその顔に見覚えがある。穴を当てる名人なのか、寺田は朝から三度もその窓口で顔を合せていたのだ。大穴の時は配当を取りに来る人もまばらで、すぐ顔見知りになる。やあ、よく取りますね、この次は何ですかと、寺田はその気もなくお世辞で訊いた。すると、男はもう馬券を買っていて、二つにた畳たんでいたのを開いて見せた。1だった。寺田はどきんとして、なにかニュースでもと問いつけると、いや僕は番号主義で、一番一点張りですよ。そう言ったかと思うと、すつとスタンドの方へ出て行つた。

その競走レースは七番の本命の馬があっけなく楽勝した。そして

それが淀の最終競走^{レース}であつた。寺田は何か後味が悪く、やがて競馬が小倉^{こくら}に移ると、1の番号をもう一度追いたい気持ちにかられて九州へ発^たつた。汽車の中で小倉の宿は満員らしいと聞いたので、別府^{べつぷ}の温泉宿に泊^{とま}り、そこから毎朝一番の汽車で小倉通いをすることにした。夜、宿へつくつくたくたに疲^{つか}れていたのも、寺田は女中にアルコールを貰つてメタボリンを注射した。一代が死んだ当座寺田は一代の想い出と嫉妬^{なや}に悩まされて、眠れぬ夜が続いた。ある夜ふとロンパンの使い残りがあつたことを想い出した。寺田は不眠^{つら}の辛さに堪えかねて、ついで注射をしたことのない自分の腕へこわごわロンパンを打つてみると、簡単に眠れた。が、眠れたことより、あれほど怖れていた注射が自分で出来て、しかも針の痛さも案外すくなかつたことの方がうれしく、その後脚気^{かっけ}になつた時も

メタボリンを打つて自分で癒なしてしまった。そしてそれから注射がもう趣味しゅみ同然どうぜんになって、注射液を買い漁あさる金かだけには不思議に惜しいと思わず、寺田の鞆かばんの中には素人しろろうとにはめずらしい位さまじまなアンプルがはいっていたのだ。注射が済んで浴室へ行った時、寺田はおやつと思つた。淀で見たジャンパーの男が湯槽ゆぶねに浸つかつていないか。やあと寄つて行くと、向うでも気づいて、よう、来ましたね、小倉へ……と起そうとしたその背中を見た途端、寺田は思わず眼を瞠みはつた。女の肌のように白い背中には、一という字の刺青いれずみが施ほどこされているのだ。一——一——一代。もしかしたらこの男があつた馬の男」ではないか、一の字の刺青は一代の名の一字を取つたのではないかと、咄嗟とつさの想いに寺田は蒼ざめて、その刺青は……ともうたしなみも忘れていた。これですかと男はいや

な顔もせず笑つて、こりや僕の荷物ですよ、「胸に一物、背中に荷物」というが、僕の荷物は背中に一文字でね。十七の年からもう二十年背負っているが、これで案外重荷でねと、冗談口の達者な男だった。十七の歳から……？ と驚くと、僕も中学校へ三年まで行つた男だが……と語りだしたのは、こうだった。

生まれつき肌が白いし、自分から言うのはおかしいが、まあ美少年の方だったので、中学生の頃から誘惑ゆうわくが多くて、十七の歳女専の生徒から口説くどかれて、とうとうその生徒を妊娠させたので、学校は放校処分になり、家からも勘当くわんたうされた。木賃宿を泊り歩いているうちに周旋屋しゅうせんやにひつ掛つて、炭坑たんこうへ行つたところ、あらくれの抗夫達がこいつ女みてえな肌をしやがつてと、半分は稚児ちごいじ苛めの気持と、半分は羨望せんぼうから無理

矢理背中に刺青をされた。一の字を彫りつけられたのは、抗夫長屋ではやつていた、オイチョカブ賭博の、一、二、三、四、五、六、七、八、九のうち、この札を引けば負けと決つてい
る一の意味らしかった。刺青をされて間もなく炭坑を逃げ出すと、故郷の京都へ舞い戻り、あちこち奉公したが、英語の読める丁稚と重宝がられるのははじめの十日ばかりで、背中の刺青がわかつて、たちまち追い出されてみれば、もう刺青を背負つて生きて行く道は、背中に物を言わす不良生活しかない。インケツの松と名乗つて京極や千本の盛り場を荒しているうちに、だんだんに顔が売れ、随分男も泣かしたが、女も泣かした。面白い目もして来たが、背中のこれさえなければ堅気の暮しも出来たろうにと思えば、やはり寂しく、だから競馬へ行つても自分の一生を支配した一の番号が果たして

最悪のインケツかどうかと試す気になって、一番以外に賭けたことがない。

聴いているうちに寺田は、なるほどそんな「一」だったのかと、少しは安心したが、この男のことだから四条通の酒場も荒し廻つたに違いないと、やはり気になり、交潤社の名を持ち出すと、開店当時入口の大硝子ガラスを割つて以来行つたことはないがと笑つて、しかしあそこの女給で競馬の好きな女を知っている。いい女だったが、死んだらしい。よせばいいのに教師などと世帯を持ったのは莫迦だったが、しかしあれだけの体の女はちよつとめず……おや、もう上るんですか。

部屋へ戻ると、女中が夕飯を運んで来たが、寺田は咽喉のどへ通らなかつた。すぐ下げさせて、二時間ばかりすると、蒲団を敷きに来た。寺田は今夜はもう眠れぬだろうと、ロンパン

を注射するつもりで、注射器を消毒していると、蒲団を敷き
終った女中が、旦那様注射をなさるのでしたら、私にもして
下さい。メタボリンは脚氣にいいんでしようかと腕をまくった。
寺田はむつちりしたその腕へプスリと針を突き刺した途端一
代の想いがあつた。針を抜くと、女中は注射には馴れている
らしく、器用に腕を揉みながら、五番の客が変なことを言う
からお咲ちゃんに代つてもらつていいことをしたという言葉
を聴いて、はじめて女中が變つていたことに気がついたくら
い寺田はぼんやりしていた。男前だと思つて、本当にしよつ
ているわ。寺田の眼は急に輝いた。あの男だ。あの男がこの
女中を口説こうとしたのだ。寺田は何思つたか、どうだ、も
う一本してやろうか。メタボリン……？ いや、ビタミン
Cだ。Cつていいんですか。Bよりいいよと言いながら、し

かし注射器にはひそかにロンパンを吸い上げた。

女中は急に欠伸あくびをして、私眠ひねくなつて来たわ、ああいい気持、体が宙に浮うきそう、少しここで横よこにならせて下さいね。蒲団すそまくらの裾を枕まくらにすると、もう前後不覚ふかくだった。二時間ばかり経たつて、うつとりと眼をあけた女中は、眠ねっていた間何をされたかさすがに悟さとつたらしかつたが、寺田を責める風もなく、私夢ゆめを見てたのかしらと言いながら起たち上ると、裾をかき合せて出て行いつた。寺田はその後姿を見送る元氣もなく、自責の想おもいにしよげかえつていたが、しかしふとあの男のことを想おもうと、わずかに自尊心の満足はあつた。

翌日、小倉競馬場の初日が開かれた。朝からスリふるよびが続けていた寺田は、スレばスルほど昂奮きうふんして行いつた。最後の古呼特ハふるよびン競走レースで、寺田はあり金全部を1のハマザクラ号に賭けた。

これを外してしまえば、もう帰りの旅費もない。

ぱつと発馬機がはね上った。途端に寺田は真蒼になった。内枠のハマザクラ号は二馬身出遅れたのだ。駄目だと寺田はくわえていた煙草たばこを投げ捨てると、スタンドを降りて、ゴール前の柵さくの方へ寄って行つた。もう柵により掛らねば立つておれないくらい、がっくりと力が抜けていたのだ。向う正面の坂を、一頭だけ取り残されたように登って行く白地に紫の波型入りのハマザクラを見ると、寺田の表情はますます歪ゆがんで行つた。出遅れた距離を詰めようともせず、馬群から離れて随ついて行くのは、もう勝負を投げてしまったのだろうか。ハマザクラはもう駄目だ！ と寺田は思わず叫んだ。すると、いや大丈夫だだいじょうぶ、あの馬は追込みだ、と声がした。ふと振り向くと、ジャンパーを着た「あの男」がずつと向う正面を睨ん

で立っていた。白い顔が蒼ざめている。自分とおなじように
スツて来たのだと、見上げていると、男は急ににやりとした。
寺田はおやと正面へ振りかえった。白地に紫の波型がぐいぐ
いと距離を詰めて行く。あつと思つていゝうち、第四角で
はもう先頭の馬に並んで、はげしく競り合いながら直線に差
し掛つた。しめたツと寺田が呶鳴ると、莫迦ッ！ 追込馬が
鼻に立つてどうするんだと、うしろの声も夢中むちゆうだつた。鼻に
立つたハマザクラの騎手は鞭を使い出した。必死の力走だが、
そのまま逃げ切つてしまえるかどうか。鞭を使わねばならぬ
ところに、あと二百米メートルの無理が感じられる。逃げろ、逃げ
ろ、逃げ切れと、寺田は呶鳴つていた。あと百米。そうれ行
け。あッ、三番が追い込んで来た。あと五十米。あッ危い。
並びそうだ。はげしい競り合い。抜かすな、抜かすな。逃げ

ろ、逃げろ！ ハマザクラ頑張がんばれ！

無我夢中に呶鳴っていた寺田は、ハマザクラがついに逃げ切ってゴールインしたのを見届けるといきなり万歳と振り向き、単だ、単だ、大穴だ、大穴だと絶叫ぜつきようしながら、ジャンパーの肩に抱きついて、ポロポロ涙を流していた。まるで女のよううらに離れなかつた。嫉妬うらも恨みも忘れてしがみついていた。

(昭和二十一年四月)

底本：「ちくま日本文学全集 織田作之助」筑摩書房

1993（平成 5）年 5 月 20 日第 1 刷発行

底本の親本：「現代日本文学大系 70 武田麟太郎・織田作之助・島木健作・檀一雄集」筑摩書房

1970（昭和 45）年 6 月 25 日発行

初出：「改造 第二十七卷第四号」改造社

1946（昭和 21）年 4 月 1 日発行

入力：富田倫生

校正：江戸尚美

1998 年 3 月 27 日公開

2011 年 1 月 9 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。